日本美の再建
ア
佐藤一英著
日本美の再建
ウ
佐藤一英著

日本詩と定型

一

最近日夏耿之介氏が「中央公論」に書かれた詩論はなかなか問題になつてゐるやうである。この論は萩原朔太郎氏が昨年同誌に書かれたものとともに「現代詩再建」といふ題目に、何かの解決法を指示してゐる、といふ點で注目していいものである、と私も思ふ。兩氏とも具體的に明確にその方途を表示したとはいへないが、ともに大正期の無規律な自由詩時代に、最も盛んに作家活動をした兩詩人

が、手さぐりにせよ、規律ある詩を求めはじめてゐることだけは受けとれる、といふ點で私に並々ならぬ興味があつた。

先日詩壇の元老である人見東明氏に會つたとき、氏は言はれた。「ふたゝび制約を守るべきときが來たのですね。自由解放で散文詩までも探求しても詩は遂に得られなかつたのですね。」また氏は言はれた。「頭韻を持つた十二音句の四行詩、新韻律の組織を持つた四十八音詩。聯。たしかに今までの詩は長すぎましたよ。無意味に長すぎるものが多かつた。聯で詩は書けませうね。」

明治四十二年五月、加藤春介、福田夕咲、三富朽葉らの諸氏とともに、自由詩社を結び、詩歌革新を叫び、自由詩誌「自然と印象」を發行した青年詩人東明氏も、今では、右のやうな感懷を持つてをられるのである。その當時口語自由詩をまつさきに發表し、制約破棄を唱へた相馬御風氏が、今日、良寛に心醉し、萬葉ぶりの短歌を作つてをられることはあまりに人に知れ過ぎてゐる。また當時、御風詩についで口語自由詩を出した少年詩人川路柳虹氏が近年、新律格詩を唱道されたことも、詩の愛讀者なら知つてゐよう。

このやうな詩壇的な現象の變化も、滿洲事變を契機として起り、支那事變にあつて一層盛んになつてきた新日本文化の建設的要求に關係がないとはいへない。しかしこれを單に詩史的な發展道程として考へても、當然さうなるべきものが、さうなつたのに過ぎない。東明氏の感懷の中にあるやうに、昭和とともに開かれた散文詩の道は、文學の處女地には通じてゐたが、詩の花園には行きつくことができないものであつた。詩は韻文によつて取りもどすより外ないものであつた。

しかし、東明氏がいはれるごとく、在來の韻文詩は無意味に長かつたのである。だからといつて、短歌や俳句にかへることはできない。ここ數年一部詩人の短歌

あそび、俳句いぢりがあるが、これは詩的精神の衰弱したもののみである。

のちに東明氏の自由詩社に入つた經歷を持つ福士幸次郎氏の音數律論といふものは、昭和九年九月におこつた新韻律主義新詩運動に大きな知的寄與をした。新らしい韻律論は、大木惇夫、伊福部隆彥、宍戸儀一、一戸玲太郎、折戸彫夫、杉本駿彥、坂野草史、鳥羽茂等の新詩人によつて擡頭した。そして當然の歩みとして、新定形詩より新定型詩へと發展し、遂に日本最小の完全詩型「聯」なる詩型の設定とはなつたのである。今日、聯による詩人は百人を超えるであらう。これは、聯は一篇の全音數が四十八音ときめられてゐるやうに、短小な詩型であつて詩作が容易なことと、その構成原理がいまだかつて見られない新らしいものであるといふ、その新精神の魅力であらうと思ふ。

二

時のつぐのひ　　薄田　泣菫

時はふたりをさきしかば
またつぐのひにかへり來て
かなしき傷におもひでの
うまし涙を湧かしめぬ

物いひ　　木下杢太郎

四本ばしらの總立ちに
棧敷ときめく國技館
お酌のくせと、あられなや

聲をはりあげ「明石龍」

わすれなぐさ　　上田　敏（譯）

ながれのきしゐひともとは
みそらのいろのみづあさぎ
なみ、ことごとくくちづけし
はた、ことごとくわすれゆく

以上は明治大正の四十八音詩の代表的な作品である。當時の新定形詩人も長い詩に嫌怠すると、このやうな作をなしたものである。しかし、その構成はこれらの詩の原型（プロト・タイプ）である今様を離れることはできなかつた。ところが最近の聯詩人は、プロト・タイプは今様長歌に求めつつ、構成にはエスプリ・ヌーボオが働らいてゐる。

夜　　一戸玲太郎

灰のいろは夜を沈む
机古りてあられ降れり
罪はあれど、今日も生きぬ
はるかなれや鐘に聽けば

火の雲　　保永　貞夫

海へ伸び指は惱めり
美しさ日日に褪せゆく
奪ひ取れ沖の火の雲
動く手は燒けて失せたり

春聯　　坂野　草史

さかり咲ける白き辛夷
日射しながく光り翳る
さらに瞳、神に逢はじ
日ごと眠り、夢に晒す

春愁　中條雅二

かりそめのひととは知れど
かりそめのひとと思へず
かはたれの水の邊りに
かなしみは雲と湧きたり

最後の一篇は一見古い感じを與へるが、音構成の上に新秩序があることは、耳に聞けばすぐ諒解されることである。しかし聯の獨自な構成美は前三者にあることは勿論である。すなはち、各十二音句を獨立的に構成するといふ聯のエスプリ・ヌーボーである。

詩歌革新といつたところで、傳統的なものをすつかり無視するといふやうなことはできるものではない。無視してやつたら、一時の流行は來すかも知れぬが、永續きするものではない。俳句が今日すつかり月並的なものになつてしまひながら宗祇の開始以來五世紀も續いてゐるといふのは、古來の基本的詩句である十二音句を主部にして成り立つてゐる詩だからである。短歌とても同じことである。短歌は十二音句二つからなる詩だ。俳句が韻律らしい韻律をなさず短歌が韻律らしいものを何か備へてゐるといふのは、短歌では十二音句の反覆がゆるされるからである。しかし十二音句構成の最小單位は四行でなければならない。今樣が構成的でないのは、十二音句四つありながら、その原理は二十四音句二つの組み立

てでなつてゐることである。聯は今様長歌を改造したに過ぎぬ、ともいへる。それであるからこそ、多數國民の支持を得ることもできるのである。

三

自由詩發生以後、詩が國民の支持を失つたことは革新に急であつて、傳統を忘れたといふところにある。傳統とは國民の中に保持されてゐるものである。國民の地盤なきところに詩は榮えない。國民とのつながりは傳統のみである。聯は傳統の上に立つて新詩學を花咲かせる。

自由詩全盛時、民衆詩なるものが唱道された。ところがその詩は傳統破壞の詩であつたので、民衆は見向もせずに、北原白秋氏の新民謠へ走つてしまつた。むろん民謠と詩では文化の水準が違つてゐるが、民衆詩の失敗は傳統の無視といふところに原因がある。自由詩全盛の大正期にもつとも多く讀まれた詩集は佐藤春夫氏の殉情詩集であらう。その中の「少年の日」といふ一連の詩は、當時の青少年の心情を完全にわがものとしてゐた。

夏

蔭おほき林をたどり
夢ふかきみ瞳を戀ひ
なやましき眞晝の丘べ
さしぐまる、赤き花にも。

秋

君が瞳はつぶらにて
君が心は知りがたし

君をはなれて唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

聯の最も近いプロト・タイプはこんなところにあるともいへよう。しかし、新詩はここへ歸ることではなくして、ここから出發することである。讀者諸君はその後、北原白秋氏の「落葉松」が愛讀されたことを知つてゐるだらう。

一

からまつの林を過ぎて
からまつをしみじみと見き
からまつはさびしかりけり
たび行くはさびしかりけり

二

からまつの林を出でて
からまつの林に入りぬ
からまつの林に入りて
また細く道はつゞけり。

國民はしばしばこのやうな古風な詩風に休みたがるものである。そして多くの自由詩人さへもまたしばしここに立ちどまる。古いこの詩歌精神。これこそ「また細く道はつゞけり」で今に來たものである。聯はこの道を國民のすべての心に通はしめ、また海外にまで通はせようとする詩である。

いつかボノオ博士が日本の短歌や俳句の特殊な美しさを推奨した文章の中で、ある美しさはあるが世界の詩歌とくらべるには構成的な美しさにおいて缺けてゐるものがあるといふ意味のことを書いてゐた。まさにその通りで、それは短歌、

俳句ばかりではなく、長歌、今様、連歌など、それらよりは少しは長い詩歌においてもさういふことはいへるのである。それも傳統であるからとて、われわれが今それを改造しないならば、世界文化への立ちおくれをいつまでも取りもどすことはできないであらう。

初出　昭和13年6月

古典日本の戰爭歌

傳統のリズム

「新日本」の創刊號に、保田與重郎氏が文藝時評を書いてゐた。その中で軍歌のことに言ひ及んで面白いことをいつてゐる。氏は新作の軍歌のうちでは「露營の歌」が傑作であるといひ、その理由を次のやうに述べてゐる。露營の歌の中では、殊に　天皇陛下萬歳といふところが、方今のリズムであり時代感覺を現してゐる。南無阿彌陀佛が源平時代のリズムであつたごとく、そのことばは、けふのいはば